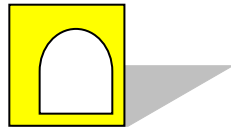


日吉台地下壕保存の会会報



第159号

日吉台地下壕保存の会

歳月は 哀しみを 癒さない

—上原清子さんと登志江さんのこと—

副会長 亀岡敦子

2025年は、第2次世界大戦が数千万人の死傷者と、地球上のほぼ全域に、破壊されつくした生活の痕跡を残して終息した日から、80年目の年となります。長い永い年月です。その長い戦後を、戦争体験者その人と、「遺族」と呼ばれる人たちはどのような思いで生きてきたのでしょうか。よく時の経過が悲しみを小さくしてくれる、とか、憎しみを消してくれる、という言葉を見聞きすることがあります。私も30年ほど前、上原清子さん登志江さん姉妹にお会いするまでそう思っていました。

戦前から、南安曇郡有明村（現安曇野市）の開業医である上原家には、姉妹の上に3兄弟がいましたが、軍医となった長男次男も、特攻隊員となった3男も戦死してしまいました。清子さんは家庭をもって、家業も遺族としての役割も引き継ぎ、私のような、上原良司の遺品展示をしたい、本を書きたいなどと、厚かましい依頼をするものにも、いつも温かく親切で笑顔でした。記憶力がよくて、食事時向かいに座る良司にからかわれてよく泣いたことなど、話をしてくれるのですが、どんな楽しい話題でも、必ず涙をぬぐうのです。

そして、医者と結婚し千葉県で暮らす、下の妹登志江さんに初めて会った時、私は矢継ぎ早やに質問をされました。なぜ戦後生まれで、家族に戦死者もいないのに戦争に関心をもったのか、なぜ実際に行動しているのかなどなど。そして自分の気持ちも早口で話してくれました。「意気地なしだから兄の書いたものはまだ読めないの。兄たちのことは全部姉に引き受けてもらって、姉には申し訳ないと思っているのよ。沖縄には辛くて行けないの。明日があるさ、明日がある…という歌があるでしょう、あの歌嫌いな、だって兄たちには明日がなかったのよ。」そして登志江さんも、静かに涙をぬぐいました。

この時、戦後50年経っていたけれど、清子さんと登志江さんの悲しみは少しも癒されてはいないのが良くわかりました。我が子を3人も亡くした両親が、これ以上の苦しみはあるまいと思う哀しみの中、社会的責任を担い生きていたのか、人前で涙を見せなかったのか、その後の上原家ゆかりの人たちとの、交流の中で次第に知ったことでした。

【目次】

巻頭言【1-2p】 歳月は 哀しみを 癒さない 副会長 亀岡敦子

報告・第27回戦争遺跡保存全国シンポジウム北九州やはた大会【2-10p】

◇大会分科会レポート一覧

◇分科会報告

◎瀬谷海軍弾薬庫跡の現状と課題 運営委員 岸本 正 山田 譲
◎3Dモデルで日吉台地下壕を探ってみよう！ 中田 均 山田 譲

◇現地見学会

◎一日コース 門司港、下関火の山砲台ほか 運営委員 山田 譲
◎半日コース 若松港にある「軍艦防波堤」 運営委員 岸本 正

◇大会アピール「B29日本本土初空襲から80年」

連載【11-12p】

設備アレコレ (39) 理科が苦手な人のための「バッテリー」 運営委員 山田 譲

秘話【12-13p】 鉄道会社の学校誘致

運営委員 佐藤宗達

報告【13p】 地下壕展示会と講演会

運営委員 小山信雄

見学会の感想【14-15】

◇慶應大学経済学部留学生クラス

◇9.11定例見学会に参加された方からの手紙

活動の記録【16p】 2024.7月～10月

お兄さんたちの戦死から80年近くたった今年9月末、相変わらず達筆の登志江さんからの便りが届きました。

登志江さんは、年齢の離れた兄姉や両親に可愛がられた末っ子で、綺麗でおおらかで素敵な人なのです。手紙には90歳すぎた夫婦が、何とか2人で暮らしていること、それでも明日はあるか不安なことなどが書かれていました。3枚の手紙の最後はこう結ばれています。

朝日歌壇の句が目にとまりました。
軍服の 遺影の三人 秋彼岸

こんな遺族や、戦争体験者、特に被爆者に先日朗報がもたらされました。2024年のノーベル平和賞は「日本被団協」に授与されることが決まったのです。その受賞理由は、以下に始まります。戦争の実相を伝える末席に連なる私たちも、気負わずに地道な活動を続けていけばよいのだと、励まされたおもいです。

広島と長崎の被爆者による草の根運動である日本被団協は、核兵器のない世界を実現するための努力と、核兵器が二度と使用されてはならないことを証言によって示したことが評価され、平和賞の受賞に至った。

報告

「第27回戦争遺跡保存全国シンポジウム 北九州 やはた大会」

8月17日（土）から19日（月）にかけて、九州国際大学において「第27回戦争遺跡保存全国シンポジウム北九州やはた大会」が開催され、延べ350名の参加となりました。初日の全体会・講演会に続き、翌日には分科会が開かれ、第3分科会では当会から「瀬谷海軍弾薬庫跡の現状と課題」、「3Dモデルで日吉台地下壕を探ってみよう！」という課題で報告が行われました。最終日には2コースに分かれ現地見学会が開催されました。

◇第27回北九州やはた大会分科会レポート一覧

【第1分科会（保存運動の現状と課題）】

No	氏名	所属団体	レポート課題
1	土屋篤典	亀島山地下工場を語りつぐ会	戦時下、三菱水島航空機製作所紫電改生産を掘り起こす
2	岸本 正 山田 譲	日吉台地下壕保存の会	瀬谷海軍弾薬庫跡の現状と課題
3	山田 譲 中田 均	日吉台地下壕保存の会	3Dモデルで日吉台地下壕を探ってみよう！
4	鮎澤 譲	山梨県戦争遺跡ネットワーク	「戦争遺跡」としての富士川発電用導水路
5	和田千代子	731部隊遺跡 世界遺産登録を目指す会	「731部隊」遺跡保存と世界遺産登録へ 経緯と課題
6	中田 均	浅川地下壕の保存をすすめる会	本土決戦準備期における小笠原の要塞化

【第2分科会（調査の方法と整備技術）】

No	氏名	所属団体	レポート課題
1	高谷和生	くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク	陸軍菊池飛行場出土演習弾等と爆撃場
2	鼎 丈太郎	戦跡保存全国ネットワーク	鹿児島県奄美大島の戦争遺跡
3	橘 尚彦	戦跡保存全国ネットワーク	大阪・旧真田山陸軍墓地の福岡県出身西南戦争戦死者墓標
4	平川豊志	松本強制労働調査団	長野県内の旧陸軍飛行場の今
5	前園廣幸	戦跡保存全国ネットワーク	北九州市の戦争遺跡「下関海峡防御の遺構」
6	工藤洋三	戦跡保存全国ネットワーク	丙編成防備衛所と二式磁気探知機

【第3分科会（平和博物館と次世代への継承）】

No	氏名	所属団体	レポート課題
1	奥村英継	戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会	韓国・済州島平和ツアー報告
2	長谷川曾乃江	NPO 法人安房文化遺産フォーラム	韓国・京畿湾エコミュージアムと仙甘学園跡
3	出口敬子	聞き書きボランティア「平野塾」	八幡空襲の記憶と記録を継承する意義
4	北原高子 松樹道真	NPO 法人松代大本営平和祈念館	ガイド活動・広報活動の広がり
5	芹沢昇雄	NPO 法人中帰連平和記念館	中帰連と記念館近況

◇分科会報告

◎瀬谷海軍弾薬庫跡の現状と課題

日吉台地下壕保存の会運営委員、岸本と山田です。今回、瀬谷海軍弾薬庫跡に現存しますコンクリート製構造物と覆土式特薬庫の遺構につきまして新たな知見がありましたのでご報告いたします。結論から申しますと、煙突基礎状と思われていた構造物は排気塔基礎であり、隣接の特薬庫と密接な関連のあったものであるらしいということです。

現在、この旧特薬庫付近は横浜市により文化財発掘調査が行われており、立入禁止になっています。私は、この地が米軍により接收（1951～2015、通信施設として使用）される以前、日本海軍により使われていた地区であることを知り、いくつかの遺構が遺ることに気づいておりました。とりわけ、こちらの当初煙突基礎状と思われていた構造物が何に使われていたのかに関心をもっていました。



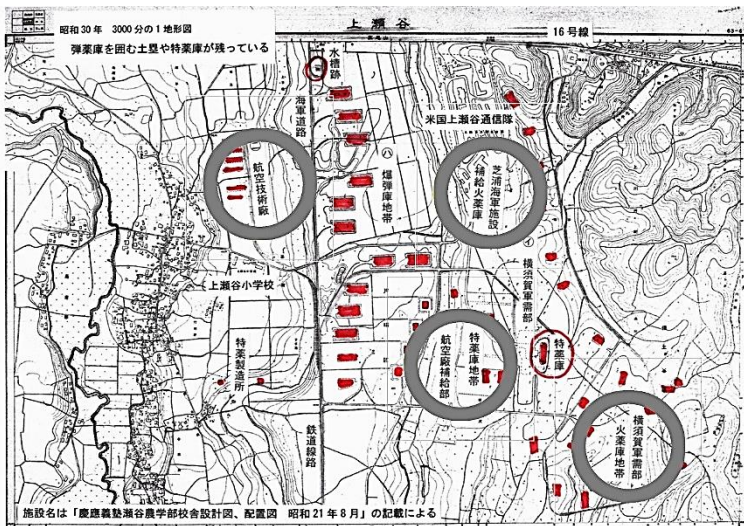
横浜市の中での位置



2027年国際園芸博覧会（通称花博）

3年ほど前、日吉台地下壕保存の会メンバーと共に現地を訪れたのを契機に本格的調査が始まりました。それ以前から地元の団体である「横浜瀬谷地図くらぶ」により実測図が作られるなどの調査がされており、参考にさせていただきました。

横浜市の中での位置はこのようになります。また、この地域は2027年国際園芸博覧会（通称花博）が開催される予定で、現在土地開発が進行中です。この催しは行政主体に現在盛んにPRされておりますが、自然や生態系に及ぼす悪影響もあるのではと懸念される面もあります。



1955年時点での倉庫や建物の痕跡



日本陸軍撮影の空中写真（1944）

この構造物のすぐ西側に米軍によって使用されていた旧特薬庫（毒ガス弾貯蔵庫）、北側の国道付近に巨大な水槽跡やタンク台座が現存します。それらの位置関係です。

海軍瀬谷弾薬庫の正確な名称と位置はこのようになっています。今回ご報告するのは、①の「第二海軍航空廠瀬谷補給工場」にあります特薬庫関連施設です。1955年の地形図には、弾薬庫や倉庫の建物の痕跡が残されています。（赤色に着色）

こちらは、1944年に日本陸軍により撮影された当地の空中写真です。中央が特薬庫で周辺にいくつかの施設が写っています。また、この地は敗戦直後に慶應義塾農学部予定地となり、その節の計画図が残されています。赤丸内が特薬庫です。但し、この計画は実現しませんでした。

これは、戦後1951年に再接収された後の特薬庫の写真です。米軍通信施設として新たな建物群が特薬庫周辺に建設されていたのかわかります。現在これらの建物は花博開発により全て撤去されています。

では、この構造物が毒ガス排気塔基礎ではないかとわかった経緯です。昨年秋でしたか、北九州市小倉南区に現存します旧陸軍曾根製造所の記事をネットニュースで私が見たことがきっかけでした。その中に、排風塔と呼ばれる円筒状の構造物の写真があり、瀬谷のものと類似があるのではないかと思います。さっそく山田に連絡すると、ニュース元である西南学院大学伊藤教授に連絡をとりました。そこで入手した資料に大きな啓発を受けることとなります。すなわち、曾根製造所は広島県大久野島で造られていた毒ガスを砲弾に充填していた場所で、排風塔は漏れ出した毒ガスを空中に排出するものであることがわかりました。さらに、現存はしませんが、千葉県習志野市にあった旧習志野学校（毒ガス学校）に図のような中和・排気塔と呼ばれるものがあり、瀬谷のものと構造が酷似していることを知りました。

実際に立入り禁止になる前、今年の発



米軍施設内の特薬庫（米軍撮影写真に加筆）

掘現場の写真には掘り出されたとと思われる多数の土管が写っていました。また、発掘調査中の現地を訪れた関係者によると、構造物直下に地下で配管と繋がる遺構を確認したと聞きました。それらにより、この構造物は隣接する特薬庫と地下の配管で繋がっており、万が一漏出した毒ガスを排出するための排気塔基礎であることがほぼ判明しました。

なお、1949年米軍撮影の空中写真に排気塔上部の影と思われるものが写っており、確かに高い筒状の排気塔があったことが実証されました。

これら一連の調査の他、地元紙による取材記事があります。本年5月には複数の砲弾が出土との報道がありましたが、信管は付いておらず危険性はないとのことでした。

ちなみに、瀬谷に保管されていた毒ガス弾は、寒川町相模海軍工廠で製造され、逗子市池子弾薬庫で充填されていました。位置関係です。

立入り禁止直前の今年の写真では、旧米軍施設が取り払われ壁面が露出した特薬庫の姿が確認されました。

最後になりますが、現在当会では、市当局（生涯学習文化財課や上瀬谷整備推進課）に遺構の保存・活用をお願いすると共に、私たちの調査結果を伝えています。しかし、発掘調査後の状況は不確定です。調査報告書発刊と引き換えに、これらの遺構は撤去されてしまう可能性も否定できません。負の遺産、危険物として不安をもつ一部の住民とも連携し、貴重な歴史遺産として保存・活用していく方向を探っていきたいと思っています。

今回のレポートに当たり次の方々の資料を参考にさせていただきました。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。以上で終わります。



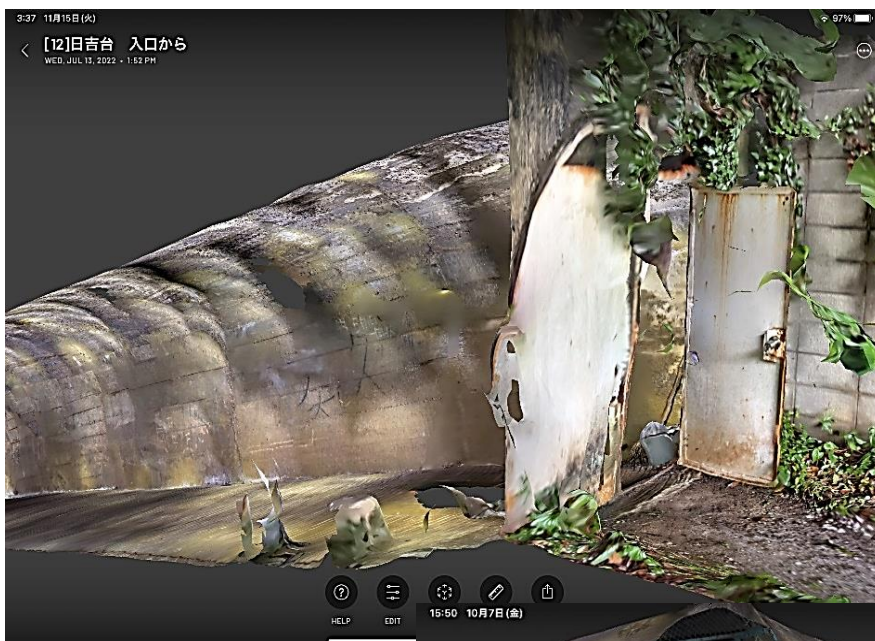
米軍施設内の特薬庫（グーグルマップに加筆）

◎ 3Dモデルで日吉台地下壕を探ってみよう！

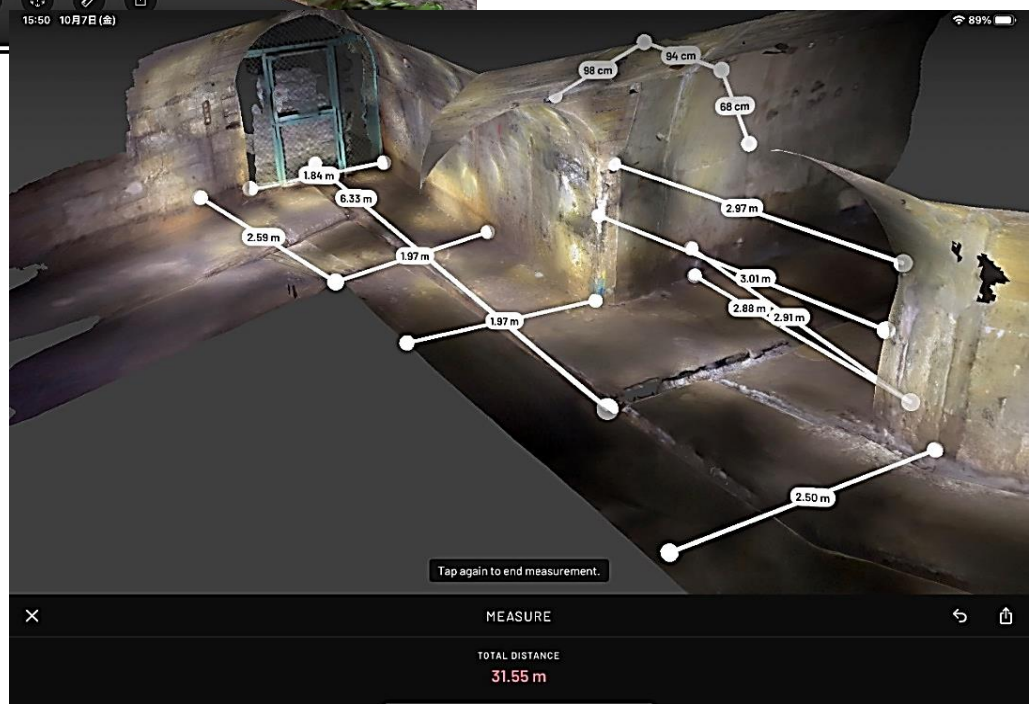
～ 3Dモデルの長所と短所～ 当会会員 中田 均 運営委員 山田 譲

「iPad Pro」(アップル社)で作成した3Dモデルの活用について長所と欠点について整理してみました。

- (1) 日吉台地下壕はコンクリートの壕なので照明さえあれば、きれいな画像として再現してみることができました。
- (2) 角度を変えながら色々なところの計測が出来ました。
- (3) 日吉台地下壕がどんなところか、3Dモデルをプロジェクターに投影して皆様に説明することができました。写真や図をパワポに取り込み説明していたのを、「iPad Pro」の画面を指を使って、前後左右に、大きく小さくしながら説明することができました。
- (4) 欠点は、長い通路などをとると3Dモデルは歪んだものになってしまうため、局所的な所を別々に撮りました。
- (5) 課題は、3Dモデルのシェア方法です。今のところ3Dモデルを写真に置き換えてシェアしています。



3D画像：連合艦隊地下壕
入口と下り坂道



3D画像：暗号室手前の通路

◇現地見学会

◎戦争遺跡保存全国ネット北九州やはた大会 フィールドワーク

「1日コース 門司港・下関火の山砲台ほか」 運営委員 山田譲

戦争遺跡全国ネット北九州やはた大会のフィールドワーク1日コースに参加してきました。見学先は4か所でしたが、バスで移動する途中、沿道に次々と砲台・堡塁跡や鉄道の旧駅舎などがあり、関門海峡が陸路、海路、軍事上の要衝だったことを実感しました。また壇ノ浦や巖流島もあり、歴史の舞台を自分の目で見ることができました。

(1)門司港「旧大連航路上屋」

朝、JR八幡駅前からバスで出発し、初めに向かったのは門司港でした。ここは関門海峡の九州側の港です。対岸の山口県下関港と対になっています。どちらも朝鮮半島、中国大陸への玄関口でした。この門司港では客船・貨物船が接岸して、「上屋」と呼ばれる建物の2階からブリッジを渡して直接船に乗り降りし、貨物を積み込んだり陸揚げできるようになっていました。その岸壁は今では50mほど埋め立てられていて、現在はここに接岸することはできません。しかし全長200m以上の細長い「上屋」は、しゃれたアールデコのデザインで展示館などとして活用されています。



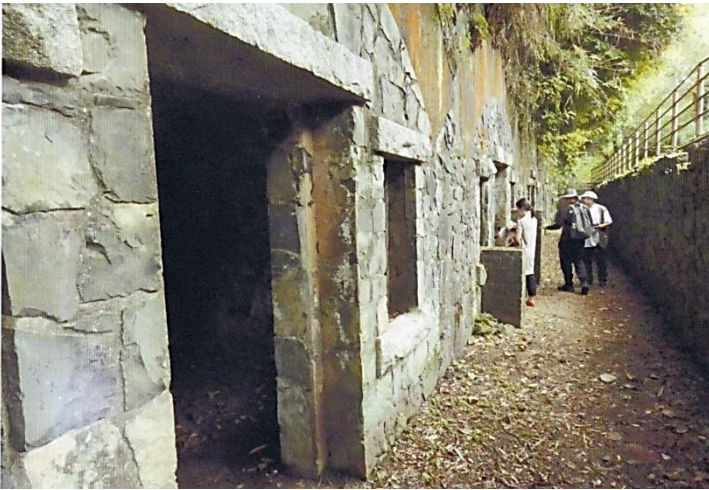
門司港「旧大連航路上屋」

「旧大連航路上屋」の名称になっている大連航路というのを私は初めて知りました。展示館でもらったチラシによれば「大阪で貨物を積み神戸で旅客が乗り込み、瀬戸内海を経て門司港に寄港、そして大連へ向かう航路」とのことです。「門司から大連までは船中2泊の旅」とのことです。「上屋」は昭和4年の竣工で「満州国が建国されると隆盛を極め」とも書かれています。大連は言うまでもなく「満洲国」の入口です。満洲事変以降の中国侵略戦争、満洲植民地化と切っても切り離せない港であり「上屋」だったのだと思うと、何かつらい気持ちになります。

(2)下関市火の山砲台跡

バスは関門橋を渡り山口県側に進みました。橋を渡ると目の前に標高268mの高い丘がせまってきます。その丘の上に火の山砲台跡があります。これは明治21年に着工した大規模な砲台跡です。関門海峡を守り瀬戸内海への敵艦の侵入を防ぐ砲台群です。仮想敵国はロシアです。その後、帝政ロシアは崩壊し昭和10年に無用となった大砲は撤去されました。アメリカとの戦争になると防空戦のための高射砲台がここにも据え付けられました。しかしB29爆撃機は関門海峡に大量の機雷を投下して海峡を封鎖してしまいました。ここの高射砲はこれに対して役に立ったとは思えません。

この砲台群跡の保存状態はとても良好で驚きました。山頂部全体が公園として整備されています。「瀬戸内海国立公園火の山」という石造りの看板が立っていました。初めに着いた所はロープウェイの発着場の横で、発掘調査の最中でした。園内の各所に砲座、観測所、側砲庫、弾薬庫、兵舎の跡があります。中でも大規模だったのは第四



下関市火の山砲台兵舎跡

砲台の「地下倉庫(掩体壕)」と名付けられている地下施設です。細長い小さな台地の両側に堀のような通路があり、その通路を直角につなぐ形で細長い兵員室が5室掘られています。兵員室の長さは40m位で幅は7~8m位。5室の兵員室の左右には長さが半分ほどで行き止まりの弾薬庫が2室あります。壁はレンガではなく石を積んだ石垣のようなつくりで、天井はアーチ型のコンクリート製でした。壁も石垣をコンクリートで固めていました。猿島や観音崎砲台のレンガ造りより、ずっと頑丈そうでした。

この砲台群は海峡側だけでなく日本海側にもらんでいたようで、丘の西側には広々とした日本海が開けていました。日本海の方には小島がいくつもあるのですが、そこにも砲台が据えられていて玄界灘を防備していたそうです。これら全体が下関要塞で、海峡の両側には下関要塞司令部がありました。

私たちはそのあと海岸の方の下って満珠荘で昼食をいただきました。とてもおいしい和食でしたが外の景色もすばらしく、ちょうど大潮で海峡に渦潮ができていました。潮流の激しさに驚きました。これが壇の浦の合戦の勝敗を決した潮流なのかと納得しました。また海峡の九州側には武蔵・小次郎決闘の巖流島も見えました。

(3)小倉陸軍造兵廠・防空監視哨、平和のまちミュージアム

バスはもう一度関門橋を渡り、九州小倉に戻ってきました。小倉陸軍造兵廠は昭和8年開庁です。見学したのは小倉市大手町公園にある「小倉陸軍造兵廠跡」という記念碑と、工場屋上にあった防空監視哨を地上に移したもの、それと給水塔の6分の1のレプリカです。

最後に向かったのは小倉城跡の隣にある平和のまちミュージアムです。この敷地はかつて歩兵14連隊の火薬庫で、その後は造兵廠の敷地でした。ここの施設コンセプトは①市民の戦争体験や当時の暮らしを物語る資料などを保存・継承していく。②戦争の悲惨さや平和の大切さ、命の尊さについて考える機会を提供する、と掲げられています。展示もなかなか充実していて、360°シアターでは八幡大空襲などを映像で再現していて迫力がありました。

その中で私が一番印象に残ったのは、展示室の初めに掲げられていた高さ3mの大きな航空写真です。長崎に原爆を投下したB29が当初の目標にしていた小倉の偵察写真で、VITAL EREAの文字と4つの*印が記入されています。「致命的な地区」。何とも不気味なことばです。この「地区」の数百メートル北側に「現在地」と書き加えられています。今いるこの場所が原爆で吹き飛ばされるはずだったということです。このほかにも「原子爆弾が小倉に投下された場合の被害の想定図」もありました。爆心地から3km以内の家は全壊・焼失し、57000人の死者が想定されたそうです。

小倉や北九州市の人たちはこのことをみんな知っているそうです。ですので長崎の原爆は決して他人事ではないと感じているそうです。逆に八幡の大空襲のことは知らない人が多いようで、これは学校であまり教えていないことが影響しているそうです。このことについて大会全体集会で、会場になっていた九州国際大学の学生が調査報告をしていました。

全体にとっても充実したフィールドワークで、ご案内いただいた現地実行委員会の皆様には感謝です。北九州は初めてでしたが、遠路来た甲斐がありました。

◎半日コースの報告 軍艦防波堤

運営委員 岸本 正

半日コースは、9時半八幡駅を出発、先ず若松港（現在の北九州港）にある「軍艦防波堤」を見学した。1948年に造られた防波堤で、長さ770mのうち約400mに駆逐艦「涼月」「冬月」「柳」の3隻の船体が埋設されている。（ただ、駆逐艦は狭義の「軍艦」には分類されていなかった。）「涼月」「冬月」はその後周囲をコンクリートで固められ完全に埋没しその姿が確認できないが、「柳」だけは現在でも明確に船体が視認できる。船体上部の原形約80mにわたってその姿を残している。しかし、損傷も進んでいるようで、文化財・土木遺産としての価値が見直され適宜修復されているようで安心した。

当日は、波が荒く潮も高かったので多少の危険を感じながら見学した。軍の船ではないものの、横浜港にも廃船をふ頭に埋設した場所があったのを思い出した。

続いて、若戸大橋を渡り小倉市街地へ向かう。現在の勝山公園周辺にあった小倉陸軍造兵廠の遺構のうち「地下道」と呼ばれる場所を訪ねた。造兵廠は広大な敷地を占めていた大規模な工廠で、小型戦車・小銃・機関銃・風船爆弾・化学兵器などを製造していたという。現在地上の建物は撤去されているが、我々が見学したのは機関銃の試射場などへ続く地下道出入口の一部。天井の高い坑口のような廃墟の空間が広がっていた。主要設備に続く長大な通路が、まだ調査を待たず当時のまま残っているという。地下道の建造目的は電気・通信・水道・スチーム管などの主要設備の抗堪性を高める方法として、それらを集中して地下に埋設することだった。戦争末期には、待避所としても用いられた場所でもあった。

最後に「北九州市平和のまちミュージアム」を見学。館長の概要説明の後、自由見学。原爆投下目標地であり八幡大空襲被災地でもあったこともあり、密度の濃い展示内容に感心した。「戦前の北九州」ゾーンからスタートし「戦争と市民の暮らし」「広がる戦争と空襲」では、市民を襲う被害や空襲にまつわる資料が公開されている。とりわけ、実物大の風船爆弾や大量に束ねられた焼夷弾の展示には目を見はらせられた。「終戦の混乱と戦後復興」では戦後復興から5市合併で北九州市が誕生するまでを紹介している。

また、目玉コンテンツというダイナミックな360度シアターも圧巻で、昭和20年8月8日の八幡大空襲、原爆搭載の爆撃機が小倉上空を飛来した後、長崎に向かった翌9日の出来事を、迫力のある大画面とサウンドで迫体験できる。映像もアニメとはいえ、焼夷弾の直撃を受け鮮血が飛び散るなど迫真的なものだった。地元の方々には、こちらの展示内容に充分満足していない方もいらっしゃるようだが、このような平和博物館をもつ自治体にあらためて羨望の感をもった。

※この防波堤については、運営委員 佐藤宗達氏も過去報告されていますので、会報138号(2019.4.25)もご参照ください。



若松港（現在の北九州港）にある「軍艦防波堤」

◇第27回戦争遺跡保存全国シンポジウム 北九州やはた大会 大会アピール「B29 日本本土初空襲から80年」

2024年8月17・18・19日、北九州市八幡東区の九州国際大学を会場に、延べ355人が参加して第27回戦争遺跡保存全国シンポジウム北九州やはた大会が開かれました。開催にあたり、会場のご提供をいただいた九州国際大学はもとより、ご後援をいただいた北九州市、北九州市教育委員会、福岡県教育委員会、地元各メディアのみならず心より感謝申し上げます。

旧八幡市（現在の北九州市八幡東区・八幡西区）では、1901（明治34）年に官営八幡製鐵所が操業を開始し、恵まれた立地を生かして第二次世界大戦前には日本の鉄鋼生産量の過半を製造する国内随一の製鉄所に成長し、鋼板類や兵器材料となる特殊鋼などを製造して日本陸海軍の軍備拡張と戦争を支える基盤となりました。1944（昭和19）年6月15日、中国成都から出撃した米軍のB-29が日本初空襲となる八幡空襲を行ない、さらに敗戦間近の45（昭和20）年8月8日には市街地に向けた無差別爆撃により、2,500人余の死傷者と約14,000戸の焼失という惨事をもたらしました。八幡空襲の教訓は、「燃えない都市」造り、「平和の女神像」を中心とする景観整備など、戦後の復興の中で生かされてきました。2022（令和4）年4月には北九州市によって「北九州市平和のまちミュージアム」がオープンし、戦争の悲惨さ、命の尊さを考える拠点となっています。

北九州市内には、田向山砲台など関門海峡防備のための下関要塞の施設、石峰山部隊の高射砲陣地など数多くの戦争遺跡が良好な状態で現存しています。また小倉南区の陸上自衛隊曽根訓練所には、戦争中に毒ガス弾の製造がおこなわれた施設が残されており本格的な調査が待たれています。福岡県教育委員会は独自に県内戦争遺跡の「悉皆調査」をおこない、2020（令和2）年に報告書『福岡県の戦争遺跡』を刊行しました。そこには遺跡等624件、慰霊碑等1,025件、総数1,649件が一覧表として掲載され、詳細な図版も付けられています。「県内の戦争遺跡の適切な保護の推進」を図り「戦争の記憶・記録を次代に継承していく」（報告書序文から）ことを目的としたこの報告書の刊行は、私たちにとって大きな財産となるものであり福岡県教育委員会の進んだ取り組みに敬意を表します。しかしこれだけ多くの戦争遺跡が存在する福岡県にあって、文化財・史跡に指定された戦争遺跡は私たちの調査ではわずか6件（国2件・県1件・市町村3件）にとどまり、北九州市内には1件もないのが現状です。戦争遺跡の改変、消滅の危機は急速に進んでいます。悉皆調査の成果をもとに、できるところから史跡・文化財への指定を進めるよう、福岡県・北九州市に強く要望するものです。

指定・登録された戦争遺跡は、全国で2024年8月現在386件が確認されています。戦後80年を前に戦争遺跡を取り上げるマスメディアも増え、戦争遺跡を「語り部」として保存し活用することの必要性は国民のあいだに定着してきたと言えます。広島にある旧陸軍被服支廠が国の重要文化財に指定され、那覇市の32軍司令部壕の整備・保存に向けた調査が進むなど、市民の声と運動が行政を動かしています。他方で島根県の旧大社基地、広島の輻重隊地下被爆遺構、兵庫県南あわじ市門崎砲台など貴重な戦争遺跡の解体が急速に進んでおり、戦争遺跡保存はまったなしの状況に変わりはありません。文化庁の『近代遺跡調査報告書⑨（政治・軍事）』は刊行されないまま20年近くが経過しています。こうした文化庁の姿勢は大きな問題ですが、地方自治体にあっては国の動向に左右されることなく積極的に戦争遺跡調査をおこない、史跡・文化財への指定と活用を進めることを求めます。

ウクライナ、パレスティナで繰り返される殺りく。日本では、軍事予算の拡大、南西諸島の軍事力増強、日米軍事同盟の更なる緊密化など、「新たな戦前」といわれる状況が生まれています。「群馬の森」における朝鮮人追悼碑は、加害の事実を蓋をしようとする人たちの声によって強制撤去されました。旧軍を顕彰し美化する傾向も強くなっています。こうした状況に抗し、「新たな戦争遺跡」を作らないこと、「加害」を含め戦争の真実と平和への想いを次代に継承していくことが、私たちの運動の目的であることを確認し、この運動をさらに前進させることを誓って大会アピールとします。

連載

日吉海軍・設備アレコレ (39)

理科が苦手な人のための「バッテリー」運営委員 山田譲

女の人の中には(男でも)理科や電気に対して、苦手意識を持っている人が少なくありません。逆に年配の男性には料理に対して苦手意識を持っている人がいます。たぶんこれは慣れの問題ではないかと私は思います。私自身は子どもの時から図工と理科が好きで仕事も工場の設備係でしたが、そうではない人も多いということなのだと思います。

とはいえ海軍地下壕の案内をする以上、地下壕の土木工事や通信関係のこともある程度わかっていないといけませんので「設備アレコレ」で参考になりそうなことを書いています。その地下壕設備の一つにバッテリー室があります。ここには最近まで「バッテリー充電室」という表示が書かれていました。しかしこの表示を見て、バッテリーはここで充電して必要な所に持って行って使うのだと理解している人がいました。地下壕でそんな使い方はしないのですが、それで表示を「バッテリー室」に直しました。なお見学会用冊子の地下壕詳細図には「バッテリー室」と表記してあります。

◎バッテリーは電気をためる池

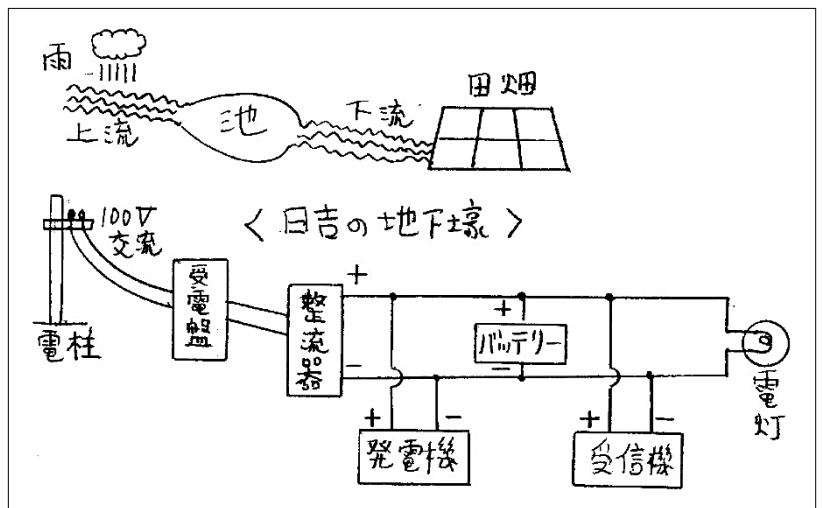
バッテリーはどこにでもあるものですが、これは何なのかというのはあまり理解されていないのかもしれませんが。バッテリーを日本語でいうと蓄電池、または電池です。これはうまい訳語です。川の水を田んぼに引き込むのに一度、池に溜めてから田んぼに流すようにすると川の水が少なくなっても田んぼの水に困りません。電気も電流という電子の流れですから、これを溜めておくものは池と同じです。

ところで電池には乾電池と蓄電池があります。ご存じの通り乾電池は電気を出し終わると終わりです。これに対して蓄電池は電気を出した後、また電気を溜めることができます。ですから地下壕内の蓄電池(バッテリー)は外部の電源によって充電しながら、同時に地下壕内の電気設備に電気を供給していました。これは停電に備えた非常電源です。

◎交流を直流になおしてバッテリーを充電

ところでここで一つ問題があります。日吉の外部電源は電力会社が供給する100ボルトの交流です。この電気は電灯や蛍光灯を点灯させるためには、そのままかまいません。ところが通信機はそうはいきません。戦前の通信機は真空管を使っていました。日吉では92式特改4受信機で、これを動かすための電源の電圧は6ボルトと200ボルトです。この200ボルトの方は直流でないといけません。

他方、バッテリーは直流の電気を出すので充電も直流電源が必要です。ですから交流100ボルトの電気の電圧を変圧して200ボルトに上げるとともに、直流に整流しないといけません。そのための整流器が必要です。他方、地下壕内の非常用発電機はおそらく直流発電機です。戦前の艦船では電気は直流でしたので、日吉も海軍なので同じだろうと思います。



バッテリー添付図

では変圧はどうすればいいのでしょうか。交流であれば変圧器（トランス）で変圧できます。しかし直流に整流してしまおうと変圧できません。しかしバッテリーを何個も使うとこれがうまくいくのです。日吉で使われていたのは鉛蓄電池です。当時の蓄電池といえばこれ以外にはありません。この起電力は2ボルトです。起電力というのはバッテリーから電気を出すときに発生する電圧のことです。この2ボルトの蓄電池を3つ直列につなげば2ボルト×3個＝6ボルトの電圧を得ることができます。100個つなげば200ボルトです。

他方、充電の方は電源の電圧が100ボルトなら蓄電池50個を直列につないで充電すればいいわけです。この50個の蓄電池のセットを2セットつなげば電圧200ボルトの直流電源をつくれます。この50個の蓄電池のうちの3個から電気をとれば電圧6ボルトの電気を取れます。

◎スマホの電源も同じ仕組み

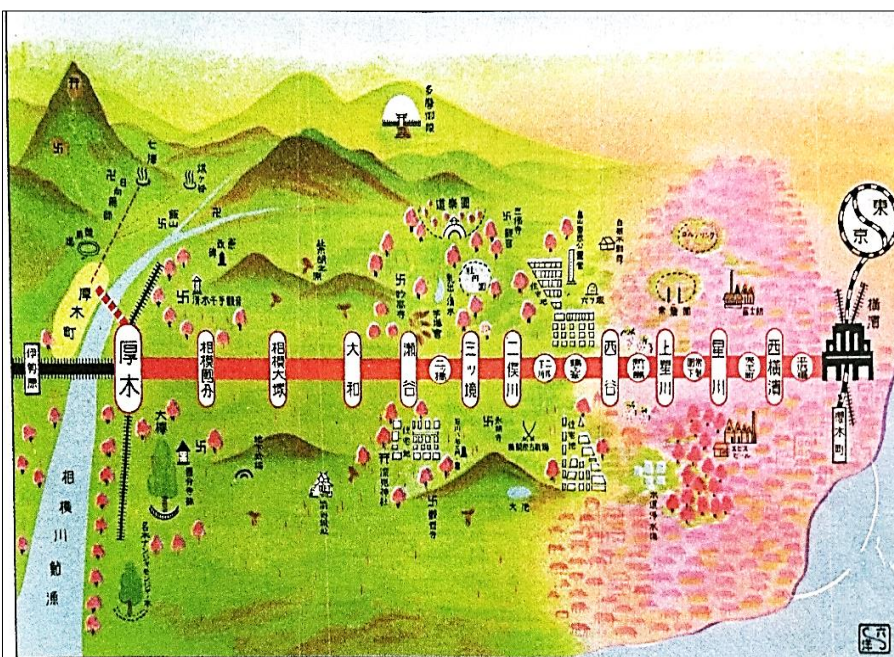
ところで真空管の受信機というのは今では博物館行きです。ですので今のスマホなどの通信機とかけはなれた話だと思えるかもしれません。しかしスマホにつかわれているICも直流でないと動きません。なのでスマホの電源装置の仕組みは今述べたことと同じです。

スマホの中にはバッテリーが内蔵されています。これはリチウム電池で充電可能な蓄電池です。みなさんはスマホを外の充電器とつなげて充電しています。この充電器はコンセントで交流100ボルト（AC100V）の電源を入力し、充電器内部で変圧・整流して直流5ボルト（DC5V）をスマホに出力します。この電気は直流ですから＋が逆では困ります。それで充電器からスマホへの接続端子は台形になっていて＋が逆にならないようになっています。交流電源のコンセントには＋はありません。このスマホのリチウム電池と同じ働きをするバッテリーが、日吉の地下壕にあったということです。

（資料集No.2「日吉海軍・設備アレコレ」の【3】【18】も参考にしてください。）

秘話

鉄道会社の学校誘致 運営委員 佐藤宗達（1967年希望ヶ丘高校卒）



3-10「沿線案内 神中鉄道」 1933(昭和8)年頃/当館所蔵(横浜都市発展記念館)

神中鉄道株式会社発行。神中鉄道は蒸気鉄道として開業し、その経営を大きく支えたのは相模川の砂利の輸送だった。ただし、1933(昭和8)年には横浜駅への乗入れを実現し、本図の通り沿線の住宅地や名所旧跡、自然を積極的に宣伝して、旅客の増加にも努めた。

横浜の西部を走る相模鉄道の前身である神中鉄道は1926年（大正15）二俣川～厚木間で運行を開始しました。その後は小刻みに東へ延伸を繰り返して1933年（昭和8）横浜駅に乗り入れました。1943年（昭和18）茅ヶ崎～橋本間を運行している相模鉄道に吸収合併されました。上瀬谷海軍補給工場、海軍航空隊厚木飛行場への引き込み線はこの頃に敷設されたのでしょうか。

しかし1944年（昭和19）茅ヶ崎～橋本間は軍事上の必要から国鉄に組み入れられて相模線となり相模鉄道は海老名～横浜間のみとなりました。

戦後の復興期に経営をどうするか首脳陣は頭を悩ませました。神中鉄道を創立したのは関東大震災後の復興事業を当てにした相模川の砂利輸送でしたが、戦後は砂利輸送は見込めず、沿線開発に力を入れるようになりました。首脳陣の頭の片隅に東急電鉄の慶應誘致の成功例があったのでしょう、1945年（昭和20）横浜大空襲で校舎を消失、間借りを続けている県立横浜一中（現県立希望ヶ丘高校）を誘致することとしました。「当時、沿線開発に腐心していた相模鉄道会社のはたらきかけだった。相鉄の故川又貞次郎社長が保土ヶ谷区内に誘致すべく、故内山岩太郎知事らに熱心に働きかけた」（希望ヶ丘高校百年史より引用）。関係者が候補地3ヶ所を視察して相模鉄道誘致地に決定、用地と希望ヶ丘駅からの道路合わせて2万坪の寄付を受けることとなった。

1950年（昭和25）県が予算を計上、土地の整備、校舎建設に着手、1951年（昭和26）新校舎落成、間借り生活に終止符を打った。なお1948年（昭和23）学制改革により新制高校となり男女共学となった（旧制横浜一中は男子校）。今や希望ヶ丘はベッタウンとなり、住宅が密集し、相模鉄道はいずみ野線（二俣川～湘南台）を開業、関東私鉄大手の1社となりました。昨年には西谷から日吉に乗り入れをしたので日吉～湘南台が繋がり、日吉と慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスが繋がりました。

報告

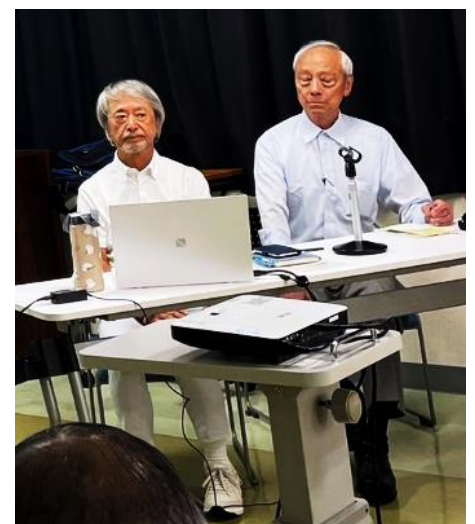
地下壕展示会と講演会

運営委員 佐藤宗達 小山信雄



一昨年、昨年に続き“日吉の本だな（日吉図書取次所）”にてパネル展示会を行いました。日吉の本だなは、一昨年1月に慶應義塾大学日吉キャンパス内（協生館1F）にオープンし、全ての横浜市立図書館の本の貸出、返却サービスを行っています。8月18日（日）～9月3日（火）迄、パネルの展示及びスクリーンによる見学会の動画紹介を行い、多くの方の関心を集めることが出来ました。

また、コロナにより中止となっていた港北図書館（菊名）でのパネル展示会、および講演会も同様に引き続き開催することが出来ました。展示会の期間は、7月17日（水）～8月17日（土）。コロナ対策にも充分気を配り、関係者と事前対応を協議の上、開催に漕ぎつけました。会場の港北図書館1階の“港北まちの情報コーナー”で展示パネルに関心を持っていただける方も数多く、7月20日（土）と8月3日（土）の両日には、個別の説明を行う“ミニレクチャー”も行い、日吉台地下壕への関心と理解を深めていただけました。8月10日（土）には図書館二階の会議室で講演会を行いました。猛暑の日ではありましたが25名の方々に来場いただき、90分の講演の後の質疑応答時には複数の方々から質問やご意見をいただきました。今回は、10代の学生の方々が4名参加され、講演後にも沢山の質問を頂きました。特に特攻隊の話、地下でのモールス信号の話への関心はかなり高かったようです。アンケートにも多くのご意見や感想をいただきました。地下壕の存在を明確にご存じの方は数少なく、「是非見学してみたい」とのご意見も多く寄せられました。地道な活動ではありますが、今後とも継続して地下壕の存在を広めて行ければと思います。



見学会の感想

◇2024.6.28 慶應義塾大学経済学部留学生クラス15名の見学会があり、「学期末の授業への感想でも、見学会が大変印象深かったという学生が何人もおりました」との高橋先生からのコメント頂き、アンケートも送って頂きました。一部を以下ご紹介いたします。

◎日吉で戦争の時使われた地下壕がのこっていることは初めて知りました。地下壕見学も初めてなのですごく期待しました。見学は思うよりすごかった。解説を聞いてながらメイズ(マ)のような地下で歩くのは冒険みたいにとってもいい体験です。歴史の重さを感じました。

◎最近、キャンパスにある第二次世界大戦中に使われてた地下壕に行ってきた。そこは通信センターとして使われた場所で、いろいろ考えさせられる経験だった。地下壕に入ったとき、冷たくて湿った空気が感じた。この中で、当時の人たちが避難してた場所であるのは大変だったと思った。地下壕の中には、当時のままの備品が展示されてた。特に印象に残ったのは、suicidal pilot の信号の録音したものをきいたこと。とても悲しくて、若い命が戦争の犠牲になってしまった。戦争の残酷さを改めて感じた。そして、今の平和がどれだけ大事かってことも実感した。今の私たちが平和に暮らせてるのは、過去に多くの人たちが頑張ってくれたおかげなんだ。そのことを忘れていけないし、これからも平和を大事にしていかなければいけないと思っている。

◎日吉海軍地下戦壕参観の感想：2024年6月28日、クラスメイトと教授と一緒に、日吉の海軍地下基地を見学しました。この見学は私に深い感銘を与えたので、ここに私の考えを記録したいと思います。

私の日本語はあまり上手ではないため、ボランティアの方々の説明をすべて理解できなかった部分もありましたが、日本の神風特攻隊についての話は今でも鮮明に覚えています。指揮官たちが戦争の勝利のために、十五、十六歳の子供たちに、着陸できない飛行機を操縦してアメリカの軍艦を攻撃するように強制したことを聞いて、非常に胸が痛みました。この年齢の彼らは本来、学校で勉強し、青春を楽しむべきでした。戦争がなければ、彼らの悩みはせいぜい宿題や片思いの相手のことであっただけかもしれません。しかし、当時の日本国内の少数の右翼分子やファシスト戦犯のために、彼らの命はその年齢で永遠に止まってしまいました。

個人的には、第二次世界大戦中、多くの日本国民や日本兵士たちは善良であったと思います。もし戦争がなければ、彼らは大学教授や料理人、歌手などになっていたかもしれません。しかし、彼らは軍官の洗脳によって他国の国民に対して焼き討ちや殺戮、略奪などの悪事を働きました。彼らの多くは異国の地で亡くなり、中国やシベリア、上海などで命を落としました。そして日本が侵略戦争を起こした原因となった張本人たちは、まだ多くが処罰されていません。これを許すことは絶対にできません。さらに多くの戦犯が靖国神社で奉られていることは、全ての反ファシズム活動家や闘士たちに対する侮辱であり嘲笑です。

これらの言葉を書いたのは、憎しみの感情を吐き出すためではありません。歴史を忘れてはならない、忘れることもできない中国人としての責任があります。また、私は先輩たちの犠牲を無駄にする権利もありません。しかし、今の日本国民の多くは私と同じように戦争に反対していると信じています。戦争は人々に苦しみをもたらすだけであり、正気の人なら誰も戦争を支持しないでしょう。世界が永遠に平和であり続け、すべての国の人々が戦争による苦しみを再び経験しないことを願っています。

◇2024.9.11 定例見学会に参加された方からお手紙頂きました

沼知朋之様

9月11日の見学会に参加させて頂いた第5班の唯一の老人、沼知と申します。私のような何もしていない者が、わざわざアンケートをお送りしようかどうかと迷いましたが、遠藤様の情熱に感動し、お礼を申しあげなければいけないと思い筆をとりました。地下壕でお聞きした遠藤様の説明や、特攻隊の遺族の方への聞き取り等頭が下がります。

私の父は海軍の通信兵としてインドネシアの西側、あまり聞いたこともないシメルエ島（現在ではネットで検索するとサーフィンのメッカとして出てくるシメルエ島）のジャングルで終戦を迎え、捕虜になり当時のシンガポールのチャンギ捕虜収容所に2年間捕虜となり、現在のチャンギ空港から市内へ伸びる高速道路の基となる道路建設作業に従事させられていたと聞きました。

戦争の間のことは殆ど話をしない父でしたが、10年ほど前に亡くなるまで毎年のように上野の精養軒で生き残った戦友とシメルエ会を開いておりました。足が悪くなって一緒に行くようになって隣で聞いていると「本当に通信機は重たかった。ジャングルであれを持ち運ぶのはとても大変だった」という話がとても印象に残っています。

日吉の地下壕からどこかを經由しながらも、指示が出て、私の父がジャングルで指示を受け取っていたのだと、いまさらながら父を感じたものでした。指示を出す先には当然特攻隊や、離れ島のジャングルに潜む兵隊が居るわけで、日吉の寮のローマ風呂の写真や、食料庫を拝見すると、その差が一気に実感として感じられました。

父は捕虜収容所内で管理者のインドネシア人と仲良くなりインドネシア語がとても流暢になりました。昭和22年5月の夜、翌日に処刑になる予定だから逃げた方が良いとアドバイスされ仲間と命からがら逃亡し6月8日に佐世保に戻ることができたという日記があります。詳細は判りませんが、父はその後そのインドネシア人の家族とコンタクトできるようになり、息子さんを日本に迎え医者になるまで支援しました。

父の最期に立ち合いましたが、病院の白い壁に向かって、「戦友が待っているから行くよ」と言い、手旗信号で「みんな、仲良くね」と手を振って静かに亡くなりました。通信兵は人生の最期まで若い時に学んだことを忘れないんだと思うと同時に、戦争の影響の大きさを痛感しました。特攻隊の信号が消えて、人生が終る人、戦争の傷をずっと抱えて生きていく人、戦争の影響は各々の人生に決定的な影響を与えています。

皆様の活動が「戦争の実態」と、「指示する側」の実態を肌で感じさせ、我々に「戦争はしてはいけない」と教えてくれます。

何もできませんが、私の周りには慶應大学工学部出身者が沢山おり、彼らに聞いてみると高校サイドには行ったことがなく、知らなかったと言う者ばかりです。

今回の見学会で購入させて頂いた3種類の資料と写真を使って彼等にまず説明、その後彼等のルートで皆様の活動を認知してもらうことに務めたいと思います。

歩きながらの遠藤様の聞き取りのお話や、参加お願いをした時の佐藤様の素早い対応等感じているばかりです。

有難うございました。

ノーベル平和賞に 被団協（日本原水爆被害者団体協議会）の受賞が決まりました。「平和のための戦争展 in よこはま」の実行委員長は、5月に亡くなられた脚本家の小山内美江子さんに代わって、被団協事務局次長の和田征子さんをお願いしていますので、「戦争展」のラインはお祝いのメッセージに溢れました。選ばれた背景には世界情勢の厳しさも感じます。

10月中旬、半月遅れの金木犀が香ります。 喜田



金木犀

活動の記録 2024年7月～10月

- 7/10(水) 定例見学会 36名
 7/13(土) ガイド養成講座第4回 修了者15名
 7/15(月) 地下壕見学会 106名 慶應義塾大学授業
 (都倉先生)
 7/17(水)～8/17(土) 日吉台地下壕展示 (港北図書館)
 7/20(土)・8/3(土)ミニレクチャー
 7/18(木) 会報158号発送 (来往舎小会議室)
 7/20(土) 地下壕見学会 12名 専修大学ゼミ
 7/25(木) 地下壕見学会 37名 塾史展示館
 7/27(土) 定例見学会 37名
 8/1(木) 地下壕見学会 10名 箕面自由学園
 8/3(土) 地下壕見学会 39名 塾史展示館
 8/7(水) 定例見学会 53名
 8/10(土) 港北図書館講演会 30名
 8/17(土)～19(月) 戦争遺跡保存全国大会シンポジウム
 北九州やはた大会 (九州国際大学) 分科会報告
 「瀬谷海軍弾薬庫跡の現状と課題」(岸本・山田)
 「日吉台地下壕を3Dで見る」(中田・山田)
 8/18(日)～9/3(火) 日吉台地下壕展示 (日吉の本だな)
 8/31(土) 定例見学会 (台風のため中止)
 9/1(日) ガイド学習会 日吉地区センター別館 16名
 9/4(水) 地下壕見学会 23名 田園調布学園大学
 9/5(木) 運営委員会 (来往舎小会議室)
 9/11(水) 定例見学会 40名
 9/21(土) 地区センター日吉地区センター設置講座 21名 (日吉地区センター中会議室)
 9/27(金) 地下壕見学会 学生総合センター 28名
 9/28(土) 定例見学会 40名 (日吉地区センター設置講座参加者 21名)
 10/3(木) 運営委員会 (来往舎小会議室)
 10/9(水) 定例見学会 42名



彼岸花



柿の実にメジロ

- 取材対応 塾生新聞・毎日新聞きんぱる・FMヨコハマ・共同通信社
- 地下壕見学会：定例見学会は毎月2回 第2水曜日・第4土曜日午後が基本です
- 学校関係(学術・教育)の見学は定例以外にもご相談で実施しています
- お問合せ・申込みは見学会窓口まで

連絡先(見学会) 電話 080-5612-6344 (佐藤) メール hiyoshidaichikagou@gmail.com
 (会計) 亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 電話 045-561-2758
 (その他) 喜田美登里：横浜市港北区下田町2-1-33 電話 045-562-0443
 ホームページ・アドレス：<http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口二千元以上
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
 会長 阿久澤 武士 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
 日吉台地下壕保存の会運営委員会